



及川 平治  
(栗原市教育委員会提供)

及川平治は、明治八（一八七五）年、栗原郡若柳村（現在の栗原市若柳）に農家の次男として生まれました。十二歳の時に父親を亡くしたため、暮らしぶりは貧しく、小学校の授業料を支払えずやんでいました。勉学にはげみたいという思いは強かったのですが、残念ながら平治は小学校を中退せざるを得ませんでした。

平治は、勉強を続けたいという思いを、小学校の先生であった細川牧之助に話してみました。

すると先生は、  
「私の自宅で勉強を続けてはどうだろうか。」  
と声をかけてくださったのです。

再び勉強ができると喜んだ平治は、毎日のように細川先生のもとへ通いました。細川先生は学校の勤めを終えた後、夜に自宅で平治に無償で勉強を教えました。そんな細川先生の親身になっての計らいに、平治はただただ感謝し、いつそう勉強にはげみました。細川先生は、平治の熱心さに心を打たれ、全力で支えました。

一年が過ぎたころ、細川先生は平治にこんな話をしました。

「君は、これからの新しい時代の教師として十分な素質がある。若柳の大目小学校で働いてはどうだろう。家計の支えにもなると思う。」

平治は、細川先生の思いがけない話に驚きつつも、目を輝かせながら大きくうなずきました。ここから平治の教育に携わる人生が始まったのです。平治、十六歳の春でした。

当時の大目小学校は若柳小学校の分教場になっていて、児童は一年から四年までの八十名ほどで、先生は二人か

三人でした。（すべての子どもたちが勉強にはげむようにしたい。そのために、私のすべてを注ぎたい。）平治はこの思いを胸に、教員の補助という立場で、子どもたちと親しく深くかわっていききました。幸いにもここに細川先生が勤めていました。そして先生から以前にもまして教育についての理論や技術などを熱心に学び、細川先生が驚くほど、すばらしい授業をするようになっていきました。細川先生の頭の中には平治の将来についての真剣な願いがありました。それは「平治にとって最もふさわしい仕事は教師の職だ。」「教師を養成する宮城県尋常師範学校に入学させたい。」ということでした。この師範学校は宮城県が授業料を無料にするなど、貧しい家庭の子どもを優遇する仕組みが整えられていて、教師を目指す平治の進学先として最適の学校だと考えたのです。

こうして十九歳の四月、平治は念願の宮城県尋常師範学校に入学し、卒業後は宮城県内で教師として働きました。

三十三歳の時、平治は、「文部省中等教員検定試験」に合格し、兵庫県明石女子師範学校附属小学校（現在の神戸大学附属小学校）へ主事（校長）として赴任しました。

そのころ、ほとんどの子どもたちが、家の労働力として手伝いをしたり他の家に雇われて子守をしたりして、勉強をしたくても学校に通えませんでした。細川先生の教えを思い出しながら、平治は、その子どもたちのために出張授業を行うことにしたのです。同僚とともに町内各所に出向き、太鼓を鳴らし、笛を吹いて、子守をする子どもたちを集めて、青空のもと、授業を行いました。平治は、知識を与えるだけでなく、子どもたちの「勉強したい」という思いを大切にされた教育をしていました。

そして、明石附属小学校においては、「子どもたちが自分から進んで学ぶ学校としました。子どもの多様性と個性を生かし、真理の探究法を授ける」という方針を立てました。この当時は、先生が子どもたちに知識を教えこむ授業が多かったのですが、平治は、「分団式動的教育法」という子どもたちが自ら学んでいくグループ学習や教え合い学習、体験学習等を取り入れました。この教育法は、今では一般的ですが、当時としては大変先進的な授業だったため、その反響は大きく、平治の授業を見学しようと全国各地から、年に一万人を超えるほどの参観者が訪れました。やってみたい、できるようにしたいという子どもたちの気持ちを満たしながら、試行錯誤



小学校を中退：  
今の小学校とは異なる。尋常小学校（3〜4年）卒業後高等小学校（2〜4年）があった。

無償：  
人のためにしたことに對して、見返りを求めないこと。無料。

素質：  
生まれつきもっている性質や才能。

分教場：  
本校の他に設けられた教場。現在は分校という。

多様：  
いろいろ変化に富んでいる様子。

個性：  
その人、または、その物だけがもっている、ほかとはちがった特別の性質。

真理：  
正しい考え方や知識。

探究：  
物事の本当の意味や、あり方、すがたをさぐり、明らかにしようとする。こと。

方針：  
物事を行うときの目指す方向や、やり方。

先進：  
進歩の段階が先に進んでいること。

反響：  
あることからの影響が、ほかのことにおよぶこと。

試行錯誤：  
失敗を繰り返しながら解決する方法を追求すること。

を繰り返させる平治の授業づくりには、参観者の多くが感心しました。

例えば、子どもたちがトンボをとりたいたいと思つたとき、まず手で捕まえようとし、でもなかなか捕まえられるません。そこで子どもたちは帽子をかぶせてとろうと考えました。しかし、この方法だとたまに捕まえられることはあっても、簡単ではありません。子どもたちは、何とか近づかないでとる方法はないか、と考え、竹の輪に帽子を引っかけてみました。風の通りが悪く、これもうまくいきませんでした。そして今度は、帽子の代わりに竹の輪に通しやすいうように網をつけてみたらどうだろうとやってみたら、とてもうまくいきました。トンボを捕るために、網を使えばよい、という知識だけを与えるのではなく、自分たちで試行錯誤して方法を考えさせながら、網を使うことのよさに気づかせたのでした。

また、ある日、平治は修身の時間に「病友を見舞う」という授業を行いました。

「病気で入院している小川君に、友達としてどういうことができるかな。」

と、平治は問いました。

「毎日見舞いに行つたらいい。」

「何かプレゼントしたらいい。」

平治は、子どもたちの考えにうなずきました。子どもたちの心に優しい気持ち広がっていく様子が、周りの参観者にも伝わりました。

「お見舞いの手紙を書くか、絵をかくか、あるいはおもしろいことをかいてなくさめることができるんじゃないの。」と話す、絵の好きな人は絵を、作文の上手な人は手紙をと、すべての子どもたちが進んで作業に取りかかりました。絵や作文等を小川君に届けた数日後、小川君は予想よりも早く回復し、学校に来ました。

「小川君の家族の看病はもちろんだが、みんなの友情の結果でもある。」

と平治が話すと、子どもたちから、

「喜びの歌を歌おうよ。」

との声があがり、子どもたちみんなで歌を歌って祝いました。

ところが、この授業の参観者からは、批判もありました。

「あなたの授業は、修身ではなく、図工、つづり方（作文）の授業ではないか。」

このような批判に対し平治は、

「子どもたちが友達を思い、自ら進んで考えた結果として、たまたま図工、つづり方になったにすぎないのです。大切なことは、小川君の手に渡ったときに小川君が喜んだか、はげまされたかということ。子どもたちの『真心』であり、それをどう考え、行動させるかです。」

ときっぱり説明しました。

平治の新しいやり方に批判的な人たちは少なくありませんでした。それでも平治は、授業への批判に対し、いつもまっすぐに前を見つめ、参観者たちに語りかけるのです。

「大事なことは、目の前の事実に基づいた教育をすることです。そして、子どもたち一人一人が社会の中で前向きに生きていけるように、自身自身の力で課題を解決する力をつけさせることです。」

平治には、恩師である細川先生の姿と、子どもたち一人一人の未来の姿がはつきりと見えていたのでした。

日本教育史に燦然とその名を残す偉大な教育者、及川平治の功績をたえ、大目小学校をはじめ、郷里の若柳、そして神戸大学附属小学校に胸像や顕彰碑等が設置されています。そこには、平治からほとばしり出た言葉が刻まれています。

新教育ノ幕ヲ開カン 凡テノ人ノ為ニ  
凡テノ子供等ノ為ニ 私ノ凡テヲ捨テ、



及川先生初任地の碑（栗原市立大目小学校跡地）

修身：  
今の道徳。

批判：  
物事の良い悪いを一定の考え方や資料などにもとづいて判断し、のべること。

燦然：  
きらきらと光りがやく様子。  
顕彰碑：  
個人をたたえて、広く知らせるために建てた石碑などのこと。

及川平治

明治八（一八七五年）年、栗原郡若柳村（現在の栗原市若柳）に生まれた。子どもの個性を大切にされた授業には、多くの参観者が訪れた。当時の教えこむ授業に疑問をもち、新しく「分団式動的教育法」（グループ学習や教え合い学習、体験学習等を取り入れた教育法）を主張するなど、その授業は先進的で、今日の教育の先取りといえるものであった。